

余はベンメイす

坂口安吾

青空文庫

先日朝日評論のO氏現れ、開口一番、舟橋聖一のところには日に三人の暴力団が参上する由だが、こちらはどうかですか、と言う。こちらはそんなものが来たことがない。来る筈もないではありませんか。

東京新聞のY先生（なぜなら彼は僕の碁の師匠だから）が現れての話でも、世間ではもっぱら情痴作家と云つてますが、御感想いかが、と言う。すると、それから、西海と東海と東京と三つの雑誌と新聞から同じようなことを言つてきて、私の立場に就いて、弁明しろと言う。弁明など考えたこともないから、しろと云つても、無理だ。

朝日評論のO氏も弁明を書けという。まるでどうも、私が東京裁判情痴部というところへ引きだされて目下訊問を受けているようにきめこんでいる様子で、私も恐縮したが、まったく馬鹿げた話である。

こうきめつけられては、てれてニヤニヤする以外に手がなくなつて、そうかね、私は情痴作家ですか、などと云うと、知友の筈のY先生まで、舟橋・織田も情痴作家とよばれることを厭がりますね、などと取りすましている。とりつく島がない。

いつだったか新潮社のS青年が現れて、サルトルは社会的責任を負うと声明しています

が、あなたは如何という。この方はハッキリしていて気に入ったから、勿論だ、牢屋へでもなんでも這入る、と威勢のいいところを見せて、ソクラテスを気取ったものだ。じゃ、あなたも声明を書きませんか、ときたから、私も憤然として、そんなこと書くのはヤボというものだ、作家が自分の言葉に責任を負うのは当然ではないですか、決闘して死んだ男もあるですよ（ホントかね）。あんまり見上げたことではないが自殺した先生方も多々あります。僕など生きることしか手を知らないのだから、酒となり肉体となり、時には莊周先生の如く蝶ともなれば、ここに幻術の限りをつくして辛くも生きているにすぎない。あに牢獄を、絞り首を怖れんや。絞り首は恐入るけれども話の景気というもので、ザツとこういうぐあいには御返事申上げた。だいたいサルトルが書いたから私にも書けとは乱暴な先日酔つ払つて意識不明のところを読売新聞の先生方に誤魔化されて読みもしないサルトルにつき一席口上を書いたのが運の尽きで、改造だの青磁社だのまだ出来上らないサルトルの翻訳のゲラ刷だの原稿だの飛び上るような部厚な奴を届けて汝あくまで読めというこれ実に、人泣かせの退屈きわまる本ですよ。街頭で酒店で会う人ごとにサルトルはいかがとくる。まるで私が今サルトルと別れてフランスから帰ったような有様だから、私もつい癩にさわって、うん、シロで、サルトルとシャンパンにカレイのヒレを落してオカン

した奴をのんだよ、うまくなかったね、然し^{しか}実存主義よりはいくらか清潔な飲み物でした、などと言う。すると中には、へえ、シロつてのは何ですか。君シロを知らないですか。ブルウスト先生行きつけのパリきつての上品なレストランです。ここでシャンパンを飲んだのは日本人で拙者ぐらいのもですよ、とおどかす。すると、へえ、あなたが、と云つて、私の行きつけの怪しき飲み屋の怪しき構えを改めてジロジロ見まわしたり、又は私の怪しき洋服に目をつけたりする。巴里^{パリ}へいついらつしやつたんですか、ときくから、君冗談じやないぜ、僕は日本にいくらいやしないよ、戦争になつて、やむなく交換船で追い返されてきたのだ、実存主義なんて八、九年前に僕がモンマルトルの屋根裏で寢言のつもりで言いだして、今はもう忘れてしまったんだ。執念深く覚えているのはサルトルぐらいのものだけ、と云つて、あとはクダをまいてしまふ、というテイタラクである。

作家は弁明を書くべき性質のものではない。書くが如くに行い、行うごとく書き、わが生存、わが生き方がそこに捧げられているのであるから、他の何物を怖れるよりも、自らを偽ることを怖れるものであり、すべてが厳たる自我の責任のもとに書き表されていくこと、元より言うまでもない。社会的責任の如き屁^への河童^{かっぱ}ではないですか。論ずるだけがヤボであり、そういう文学以前の問題にかかずらつて一席弁^{なまけ}じるサルトル先生も情ない

先生だが、作家に向い弁明などと注文せられる向きの編輯者諸先生は先ず以て三思三省せらるべし。

諸君は各々の家に於て日常何をしておられるか？ 思うに諸君（以下、君の中には女の方も入れてありますから）は、父であり、母であり、子であり、良人であり、細君であり、恋人であり、諸君も亦、男女の道を行われること当然ではないか。かかる私事は之を人前にさらけだすべきものではなく、礼儀に於て、常識に於て、そうである如く、如何なる破壊混乱の時代に於ても、かかる表出は礼儀化されぬ性質のものであるかも知れない。貝原益軒先生は只今房事中と来客を断られた由であるが、私はこういう聖人賢者は好きではない。こんなところは何も正直に言うことはないさ。只今所用があるからぐらいい充分で、こういう惨めな正直づらは、私はイヤだ。

文学はこういう芸のない正直とは違う。こういう時には嘘をつく人生を建前とするのが文学のもともめる真実です。

だが、諸君は各々の私事に於て、正しいこと、自ら省みて正しいと信ずることを行つていられるか。諸君は信じておるかも知れぬ。然し、それが、自ら省みること不足のせいであり、自ら知ること足らざるせいであることを、そうではないと断言し得るや。カトリッ

クに於ては、善人は天国へ、悪人は地獄へ、生れたばかりの赤ん坊は煉獄（ピュルガトワル）へ行きます。日本では普通、煉獄を地獄よりももつと悪い所のように考えているが大間違いで、ピュルガトワルとは天国と地獄の中間、即ち善ならず悪ならず、無の世界で、赤ん坊は善悪に關せざる無だから赴く。私自身の宗教に於ては、赤ん坊だけではない、自ら省みて恥なしなどという健康者はみんな煉獄へ送つてしまう。人間の眞似をしている人形だから。

諸君は夫婦であり、恋人達だ。諸君は男女の道を、恋人の道を行い、満足ですか。不安ではないのですか。平気ですか。幸福ですか。

快樂ほど人を裏切るものはない。なぜなら、快樂ほど空想せられるものはないから。私の魂は快樂によつて満たされたことは一度もなかった。私は快樂はキライです。然し私は快樂をもとめずにいられない。考えずにいられない。

諸君は上品です。私事に就ては礼儀をまもつて人前で喋らず、その上品さで、諸君の魂は眞実ゆたかなのだろうか、眞実高貴なのだろうか。

すべて人間の世界に於ては、物は在るのではなく、つくるものだ。私はそう信じています。だから私は現実に絶望しても、生きて行くことには絶望しない。本能は悲しいもので

すよ。どうすることも出来ない物、不変なもの、絶対のもの、身に負うたこの重さ、こんなイヤなものはないよ。だが、モラルも、感情も、これは人工的なものですよ。つくりうるものです。だから、人間の生活は、本能もひつくるめて、つくる事が出来ます。

私は童貞のころ、カーマストラを読み、アナーガランガを読んだ。そこに偉大な真実、現実の哲理が語られているかと思つて、何本よりも熱意に燃えて読んだほどだった。

私は近頃発禁になつたという「猟奇」だの「でかめるん」だの「赤と黒」だの「りべらる」を読む人々が、健全にして上品なる人士よりも猥^{わい}セツだとは思わない。私も、もし、カーマストラを読んだ頃のこの現実に絶望しない童貞の頃だったら、まっさきに、これらの雑誌を読んでみたに相違ない。不幸にして、今はもう読んでみる気にもならないです。私の方が、よつぽど、その道の達人なんだから。すくなくとも、私は退屈しているのです。

春^{しゅん}本^{ほん}を読む青年子女が猥^{わい}セツなのではなく、彼等を猥^{わい}セツと断じる方が猥^{わい}セツだ。そんなことは、きまりきっているよ。君達自身、猥^{わい}セツなことを行っている。自覚している。それを夫婦生活の常道だと思つて安心しているだけのことさ。夫婦の間では猥^{わい}セツでないと思つているだけのことですよ。誰がそれを許したのですか。神様ですか。法律ですか。阿^あ呆^ぼらしい。許し得る人は、ただ一人ですよ。自我！

肉体に目覚めた青年達が肉体に就て考え、知ろうとし、あこがれるのは当然ではないか。隠すことはない。読ませるがよい。人間は肉体だけで生きているのではないのです。肉体に就て知ろうとすると同じように、精神に就て、知ろうとし、求めようとする事、当然ではないですか。

「猟奇」「でかめろん」等々を読ませた方が、そういうものに退屈させる近道だ。読まなければ空想する。そしていつまでも退屈しない。読ませれば、純文学のケチなエロチシズムなどには鼻もひっかけなくなるから、文学は純化され、文学の書き方も、読み方も正しくなり、坂口安吾はエロ作家などという馬鹿げた読み方もなくなるだろう。

舞台でも、そう。露出女優や露出ダンスがハンランすれば、芸術女優の芸術的エロチシズムは純化され、高められる。

露出だの猥本などというものは、たちま忽ち、あきてしまうものですよ。禁止するだけ、むしろ人間を、同胞を、ぶじよく侮辱しているのです。そういう禁止の中で育てられた諸君こそ、不具者で、薄汚い猥漢で、鼻もちならない聖人なのだ。人間は本来もつと高尚なものだよ。肉体以上に知的なものですよ。露骨なものを勝手に見せ、読ませれば、忽ちあいて、諸君のような猥漢は遠からず地上から跡を絶つ。

肉体なんか退屈ですよ。うんざりする。退屈しないのは、原始人だけ。知識というものがあれば、退屈せざるを得ないものだ。快樂は不安定だというけれども、犬だの野蠻人の快樂は不安定ではないので、知識というものが、不安定なのです。

結婚するなら、肉体に退屈してからやりなさい。否、^{いな}結婚ぐらい、なんべんやりなおしてもよいではないですか。退屈するまで、やり直しなさい。最も、やり直すのが面倒くさかったら、やり直す必要はないです。これ又見上げた心^{こころがけ}掛だな。本当に、面倒くさかったら、ネ。女房を追い出すのは面倒だが、会社へ行くのは面倒ではない、などというのは、インチキですよ。徹底的に面倒くさいという人は、多分、一番偉いんだろう。そのくせ、飯を食うなんて、どうも、イヤだな。

失礼しました。私はまったくダメです。なぜなら、私は教師ではない。私は生徒です。そのくせ、一場のお説教に及んだ度胸はあさましい。

私は、ただ一個の不安定だ。私はただ探している。女でも、真理でも、なんでも、よろしい。御想像にお任せする。私はただ、たしかに探しているのだ。

然し、真理というものは実在しない。即ち真理は、常にただ探されるものです。人は永遠に真理を探すが、真理は永遠に実在しない。探されることによって実在するけれども、

実在することによって実在することのない代物しろものです。真理が地上に実在し、真理が地上に行われる時には、人間はすでに人間ではないですよ。人間は人間の形をした豚ですよ。真理が人間にエサをやり、人間はそれを食べる単なる豚です。

私は日本伝統の精神をヤツツケ、ものあわれ、さび幽玄の精神などを否定した。然し、私の言っていることは、真理でも何でもない。ただ時代的な意味があるだけだ。ヤツツケた私は、ヤツツケた言葉のために、欺瞞ぎまんを見破られ、論破される。私の否定の上に於て、再び、ものあわれは成り立つものです。ベンシヨウホウなどという必要はない。ただ、あたりまえの話だ。人は死ぬ。物はこわれる。方丈記の先生の仰おっしや有る通り、こわれない物はない。

もとより、私は、こわれる。私は、ただ、探しているだけ。汝なんじ、なぜ、探すか。探さずにいられるほど、偉くないからだよ。面倒くさいと云って飯も食わずに永眠するほど偉くないです。

私は探す。そして、ともかく、つくるのだ。自分の精いっぱいほかの物を。然し、必ず、こわれるものを。然し、私だけは、私の力ではこわし得ないギリギリの物を。それより外に仕方がない。

それが世のジュンプウ良俗に反するカドによって裁かれるなら、私はジュンプウ良俗に裁かれることを意としない。私が、私自身に裁かれさえしなければ。たぶん、「人間」も私を裁くことはないだろう。



私はここまで書いてきて、やめるつもりであったが、余はペンカイしない、などと云つて、結構ペンカイに及んだ形であるから、憤然として、ペンを握った。

今はもう、夜が明けるところです。私は目下、長篇小説に没頭しているのだ。だから約束した諸方の原稿を全部お断り願ひ、延期していただいたという次第なのに、朝日評論の〇先生だけ、頑として、実に彼は岩石です。女の子も、これほどツレないものではない。おかげで私はヒロポンをのみ、氣息エンエン。氏は実に二日目毎に四回麗人の使者を差向け、最後に、遂に、氏自ら現れて脅迫されるに及んで、私も泣いた。これ実に本日白昼の出来事です。大悲劇です。

私は聖徳太子ではないのだから、頭は一つ、手は一本（ペンを握る手はですよ。両手は

きかないよ) 昨日は昨日で、東京新聞のタロちゃんなる重役先生が何食わぬ顔をして、余の仕事ぶりを偵察にきて、エヘラエヘラ帰って行つた。私も遂に探偵につきまとわれる身となつて、近頃は心臓が心細くて仕方がないのだから私はベンカイなどは断じてイヤだと言うのだが、環境の悪化のせいで、ダメでした。

ちようど一番電車が通つたから、私も一つこのへんから、大攻勢にでてやろう。夜明けはある、私にも。たぶん、アルデシヨウ。私は希望に生きるですから。

小説を読むなら、勉強して、偉くなつてから、読まなければダメですよ。陸軍大将になつても、偉くはない。総理大臣になつても、偉くはないさ。偉くなるということは、人間になるといふことだ。人形や豚ではないといふことです。

小説はもともと毒のあるものです。苦悩と悲哀を母胎にしているのだからね。苦悩も悲哀もない人間は、小説を読むと、毒蛇に噛かまれるばかり。読む必要はないし、読んでもムダだ。

小説は劇薬ですよ。魂の病人のサイミン薬です。病気を根治する由もないが、一時的に、なぐさめてくれるオモチヤです。健康な豚がのむと、毒薬になる。

私の小説を猥セツ文学と思う人は、二度と読んではいけない。あなたの魂自身が、魂自

体のふるさとを探すようになる日まで。

私の小説は、本来オモチャに過ぎないが、君たちのオモチャではないよ。あっちへ行つてくれ。私は、もう、ねむい。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 05」筑摩書房

1998（平成10）年6月20日

初出：「朝日評論 第二巻第三号」

1947（昭和22）年3月1日

入力：Mana ohbe

校正：酒井裕二

2015年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

余はベンメイす

坂口安吾

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>